



彩の国  
埼玉県

ホームページ版  
(道徳教材5篇収録)

# 夢にむかって

彩の国の道徳(小学校高学年)

埼玉県教育委員会

# 夢にむかって



のマークは、コラムのページです。

- 1  わたしたちの埼玉県・埼玉県が日本一 1
- 2 ● 道ひとすじに ―日本最初の公認女性医師荻野吟子― 5
- 3 父の思いを受け継いで 7
- 4 自由学習ノート 9
- 5 わたしの心に着せる服 11
- 6 由美の交換ノート 13
- 7 ● 盲目の学者 ―「群書類従」にいどんだ埴保こー― 15
- 8 日本女性水上飛行機操縦士第一号 ―西崎キク― 17
- 9 ●  埼玉ゆかりの三偉人 19
- 10 ●  してはならないことがある！ 20
- 11 ちよつとひどくない？ 21
- 12 きくさんのなみだ 23
- 13 友達だから 25
- 14 友とのトラブル 27
- 15 ありがとう 29

● は収録されている内容です。



心に残る本の紹介

61

スリーデーマーチ

59

耳をすませばふる里の音が聞こえてくるまち

57

ぼくの学校を一番に

55

わが師は一冊の辞書 —平三郎を支えた母の思い—

53

光る歩道

51

フレンドリーウォーク

49

あなたも同じ…

47

イニシャルの落書き

45

心のほつとストーリー

44

埼玉の子ども70万人体験活動  
体験活動は豊かな心をはぐくみます!

43



さきたまの丘に立つ

41

ながい眠りからさめた古代ハス

39

ムサシトミヨを守りたい

37

わたしって何

35

「規律ある態度」「ふんぎゅんぎゅん」

33



わたし、がんばるよ

31

教育に関するすべての達成目標

## 2 道ひとすじに

### —日本最初の公認女性医師荻野吟子—

名主の五女として生まれたわが国女医の元祖荻野吟子…。

昭和十一年三月二十五日の『東京日日新聞』、日本女医公認五十周年祭の記事である。



写真提供：熊谷市教育委員会

この新聞記事の主人公荻野吟子は、武蔵国幡羅郡俵瀬（現在の埼玉県熊谷市俵瀬）に、嘉永四年（一八五一年）、名主を代々つとめてきた家に生まれた。

若くして病気になる、東京の病院に四年間入院した。この苦しい病氣との戦いから、吟子はある一つの決意をもった。（自分と同じような病氣のために、どれだけ女性がつらい思いをしていることか。こうした女性を救いたい。）

明治三年（一八七〇年）、吟子十九歳のことであった。

医者になろうと決めた吟子は、懸命に勉強にはげんだ。明治十二年、吟子はすばらしい成績で女子師はん学校を卒業した。

そして、吟子は医者への志望を先生に申し出た。

（女性が医者になりたいとは…。）と、初めはおどろいた先生も、吟子のなみなみならぬ決意をみとめ、当時の有力者である、石黒先生（軍医監石黒忠恵子爵）を紹介してくださった。

石黒先生は吟子の熱意に打たれ、医学校を二、三紹介してくださった。ところが吟子は、どの医学校からもみな断られてしまった。女性で医者になるものは、未だだれ一人としていなかったのである。

家族や周りの人たちも吟子の医者志望に反対した。

「何で女が医者になるんだ。女の医者なんてどこにもいない。

それに、そんな体で医者なんてできるはずがない。」

やつとのもことで、石黒先生が紹介してくれた医学校の一つ、『好寿院』<sup>＊</sup>に入学することを特別にみとめられた。

吟子は学費を得るために、家庭教師を二つも三つもかけ持ちした。そして、雨の日も風の日も四キロの道を歩いて学校へ通い続けた。

しかし、そんな吟子に周囲の目は冷たかった。もとは、女性の入れない学校である。吟子の通学姿は、男用の袴に高いげた。まさに男そのものになるしかなかったのである。

「あのかっこうはどうだ。男か、女か。まったく女が医者になろうなんてとんでもないことだ。」

男子生徒から指をさされてわらわれた吟子は、はずかしくて

顔も上げられなかった。

吟子はそんな自分を何度もはげまし、勉強を続けた。そして三年間通い続け、優秀な成績で『好寿院』を卒業した。

ところが、女性であるため、医学校を卒業しても、医者になるための開業試験が受けられない。吟子は何度も願書を出したが、もどされてしまった。

(もうだめなのか…。)

しかし吟子は、くじけ

なかった。なんとか医者になる道を探した。たくさんの人に医者になる方法はないかとたずねたり、何度もお願いしたりした。日本の制度で医者への道が閉ざされるなら、外国に行つて試験を受けてもいい、とさえ考えた。当時は、外国へ行くということはとても大変なことであった。吟子の強い意志に、石黒先生をふくむ周囲の人たちは深く感動し、女性が医者になるための試験を受けられるように、働きかけてくれた。

そして、吟子の努力と周囲の人たちの親身の協力が、ついに当時の衛生局にみとめられた。

「学力がある以上は開業試験を受けてよろしい。しかし、医学を修め、試験を受けるのは女性で初めてだ。」



やっとのことで吟子は開業試験を許してもらうことができた。このとき、吟子の胸には今まで以上に熱いものがこみあげてきた。

明治十八年、大変むずかしいとされていたこの試験にみごと合格した。そして、かがやかしい医者への道が開けていくのだった。

吟子三十五歳、日本で初めての公認女性医師の誕生であった。

吟子が道を開いてから五十年がたった昭和十一年五月、女医誕生五十周年祭が行われた。このとき、日本全国の女医の数は実に三千四百人にも達していた。

\*好寿院：下谷練堀町（現在の秋葉原）にあった私立の医学校

\*衛生局：当時、日本の医療行政などを担当したところ

行ってみよっ、調べこみよっ!

「荻野吟子記念館」



熊谷市俵瀬五八一—  
〇四八(五八八)一三二七



SAITAMA

## 7

## 盲目の学者

## 「群書類従」にいだんだ埒保己一

現在の<sup>げんざい</sup>本庄市で生まれた

保己一は、小さいころ、重い病気で目が見えなくなつた。保己一は十五歳の時、江戸<sup>えど</sup>に出て、雨富<sup>あめとみ</sup>検校<sup>けんぎょう</sup>の弟子となつた。最初は、はりなどによる治りようの仕方を教えられたが、生まれつきたいへん不器用で、習つても習つても、他の人と同じように覚えることができなかつた。



写真提供：本庄市教育委員会

「先生、わたしはいくら教えていただいても上手になれませぬ。才能<sup>さいのう</sup>がないのです。」

「保己一、はりなどは上手になれなくても、お前は、小さいころから物を覚えるのが得意だつたではないか。」

「はい、先生。わたしは学問を習いたいのです。」

「目の見えない者が学問の道に進むのは、さぞ苦勞も多いことだろう。しかし、どうしてもというなら、やってみなさい。」

そのかわり、三年たつても学問が進まなかつたら、故郷<sup>こきやう</sup>に

帰つてもらうぞ。」

検校はそういつて、保己一をはげました。

学問を習うといつても、保己一は自分で本を読むことができないので、本を読んでくれる人を探し、その人が読む内容を一生けん命に聞いて覚えるのであつた。

本を読んでもらうたびに、保己一の心の中に新しい世界がぐんぐん広がつていつた。じつと食い入るように耳をかたむけて聞く保己一の熱心な態度に感心して、本を読むことを申し出る人も、少しずつ増<sup>ふ</sup>えていつた。こうして保己一は、萩原宗固<sup>はぎわらそうこ</sup>という学者をはじめ何人もの先生について学問を習い、やがて、弟子をもつようになった。

保己一は、学問を続けていくうちに不便だなど感じることもよくあつた。それは、一つのことを調べるのに、関係のある本が別々の場所<sup>ばしょ</sup>にあり、みんなばらばらだつたからだ。ことに小さい本は、書かれている内容が大切であつても失われてしまうことがよくあつた。これではいけない。これらの本を項目<sup>こうもく</sup>ごとにまとめ、整理できないだろうかと考えるようになった。

保己一はめずらしい本を持つている人の話を聞くと、貸してくれるまで何度も出かけていつた。

古い本を集める仕事は、江戸の近辺<sup>きんぺん</sup>だけでなく、だんだんに広がつていつた。京都・大阪までの資料<sup>しりょう</sup>集めの旅は、八回にもおよんでいる。

集めた書物の中には、傷<sup>いた</sup>んでいて読みとることが難<sup>むずか</sup>しいも

のもあれば、その内容が正しいのかどうか不明と思われるものもあった。多くの書物を集め、それらを一つ一つ比較し、後の世に残す価値があるものを整理していったのである。

この全集の編集に取り組んで、四十一年が過ぎようとしていた。

保己一は、このようにして六百六十六冊の「群書類従」という全集を完成させた。

この本を一冊発行するためには、その三倍から十倍の資料を調べ、本当のことを確かめていかなければならなかった。

「先生、いよいよ完成ですね。」

「月日のたつのは早いものだね。目の見えないわたしが、多くの古い書物を集めることは、なみたいていのことではなかった。それらを整理して六百六十巻余りにまとめ、後の世の人たちに残すことができたのは、わたしの生がいにおいてもっともうれしいことだ。」

保己一は、目になみだをうかべながら語った。

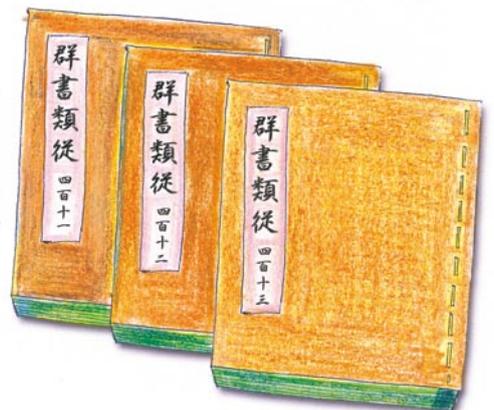
こうして、古い時代のめぼしい記録は、たいてい集められ、うっかりするとどこかへ行ってしまったかも分からない大切な



資料を、きちんと全集にまとめることができた。この大きな仕事のおかげで、私たちは日本の昔のことを正しく知ることができるようになった。国文学や歴史学をはじめいろいろな研究をする人にとって、保己一の残した仕事が多んなに役立つているかわからないほどである。

例えば、江戸時代の終わ

りころ、日本とアメリカ、ロシア、イギリスとの間で、小笠原諸島は、どこの国の領土なのかということが問題になった。この時、保己一が創立した和学講談所という学校が保存していた資料によって小笠原諸島は日本の領土であることが証明されたのである。



行ってみよ、調べとみよ!

「本庄市塙保己一記念館」



本庄市児玉町八幡山四四六  
〇四九五(七二)六〇三二



SAITAMA

## 埼玉ゆかりの三偉人

埼玉県には、私たちの心に深く感動を与え続けている多くの先人がいます。なかでも、塙保己一、渋沢栄一、荻野吟子の3人の生き方は、今を生きる私たちに、進むべき道を指し示してくれているのではないのでしょうか。

### 塙保己一 (はなわ ほきいち) (1746～1821年)

#### 江戸時代に盲目の国学者として活躍

塙保己一は、延享3年(1746)に保木野村、現在の本庄市に生まれました。7歳で病いにより失明し、12歳で母を亡くしました。15歳の時に江戸へ出て、その後学問の道を目指しました。

安永8年(1779)から、全国に散らばっていた多くの古い記録や史料を集めて分類、整理を41年間にわたって行い、666冊にまとめて出版するという大事業を成しとげました。これが『群書類従』であり、今でも歴史研究に活用されています。

ヘレン・ケラーが来日して講演した際、塙保己一を「私の人生の目標とした人であり、心の支えです。」と語っています。



写真提供：本庄市教育委員会

### 渋沢栄一 (しぶさわ えいち) (1840～1931年)

#### 日本の資本主義の基礎を築いた大実業家

渋沢栄一は、天保11年(1840)に血洗島村、現在の深谷市に生まれました。慶応3年(1867)に渡欧して西欧先進諸国を歴訪し、経済制度や近代的技術を目の当たりにしました。帰国後、明治新政府に出仕して、租税事務の処理、新貨条例・造幣規則、国立銀行条例の起草立案などに当たりますが、ほどなく実業界に転進しました。

常に「論語」を処世の基本理念とし、道徳経済合一説を唱え、第一国立銀行をはじめ、鉄道・製紙・造船など500社にものぼる企業の設立・育成に関与しました。また、福祉や教育などの社会事業にも熱心に取り組み、600余りの社会事業に力を注ぎました。



写真提供：渋沢史料館

### 荻野吟子 (おぎの ぎんこ) (1851～1913年)

#### 日本で最初の公認の女性医師

荻野吟子は、嘉永4年(1851)に俵瀬村、現在の熊谷市に生まれました。東京の病院に入院し、婦人科の治療を受けたことがきっかけで、女性医師の必要性を痛感し、医師を目指して勉学に励みました。

しかし、当時は医師開業試験は女性に認められておらず、そのため制度の改革から取り組み、自身で拓いた試験の道を第一回目で合格し、日本で最初の公認の女性医師となりました。

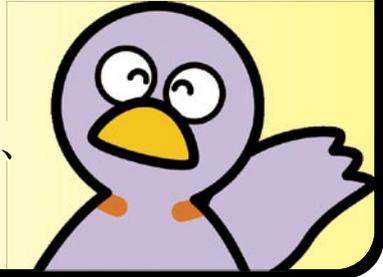
開業医として熱心に治療にあたったほか、女性の地位向上や衛生知識の普及にも大きく貢献しました。



写真提供：熊谷市教育委員会

# してはならないことがある！

だれもが、自分の夢をかなえたいと願っています。  
そのみんなの夢を大切にするためにも、  
人としてしてはならないことがあります。  
してはならないことをしないこと。そして…、  
『夢にむかって！』はばたこう！



人の物を  
とってはいけません。

うそを  
ついてはいけません。

人を  
いじめてはいけません。

人の心や体を  
傷つけてはいけません。



悪いことを しては いけません！  
いけないものは、いけないのです。



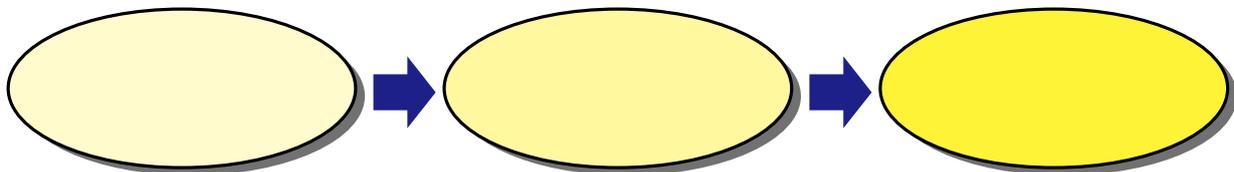
## 5 学習のきまりを守る



## 6 生活のきまりを守る



☆ さあ、あなたも「規律ある態度」でシミュレーションをしてみよう！



### 『すべてはつながっている!?!』

ところで、くつはなぜそろえるのでしょうか。そう聞かれたら、あなたはどんなふうに考えますか。くつをそろえることに理由などいらないかもしれません。また、「きれいにそろっていると気持ちがいいから」というのも事実です。

よく、出かけた後になって、「あっ、忘れた！」という経験はありませんか？ もし、家を出る前に、ちょっと立ち止まって持ち物を確認できたなら、忘れ物は防げたかもしれません。交差点に差しかけた時にも、左右を確認することを忘れないければ、事故にあうこともないでしょう。

つまり、どんなに急いでいても「あっ、くつ！」と心にブレーキをかけて、くつをそろえる。この「気づき」があれば、今、シミュレーションをして考えたように、いろいろな失敗を防ぐことにつながるのです。



### あなたは信じる!?! 『ハインリッヒの法則』

20世紀の中ごろ、アメリカの損害保険会社に勤めていたハインリッヒという人が災害の事例の統計を分せきして、「1 : 29 : 300」の法則を導き出しました。この数字の意味は、1つの死亡につながるような大きな災害が発生する背景には29件の軽傷事故があり、さらにその背景には300件のハッとすること、ヒヤリとすることなどがあるということです。

このように、すべてがつながって大きな事故が起きているのかもしれないことを考えると、みんながくつそろえをはじめ、毎日の生活でよい習慣を身につけることが、大きな事故防止にも、とても大切だということに気がつくと思います。

## 教育に関する3つの達成目標

# 「<sup>きりつ</sup>規律ある<sup>たいど</sup>態度」でシミュレーション!!

埼玉県で取り組んでいる「規律ある態度」達成目標を身につけることは、それだけにとどまらず、その他の生活にもよい効果があられるものです。

それでは、「規律ある態度」達成目標が身につくと、他にどんなことができるようになるか、シミュレーションをしてみましょう。



まずは、いっしょにやってみよう!  
例えばこんなふうに…

### 1 時刻を守る

友だちとの集合時刻を守ることができる。

決められた時刻までたくさん遊べる。

思いっきり遊ぶと心も体も気持ちがいい。

### 2 身の回りの整理整頓をする

ぬいだくつをそろえることができる。

ちょっと立ち止まって考えることができる。

交差点でも立ち止って左右が確認できる。

### 3 進んであいさつや返事をする

自分の方から元気にあいさつができる。

相手もあいさつを返してくれる

その後も会話がはずみ、友だちになれる。

### 4 ていねいな言葉づかいを身につける

「ごめんなさい」と正直にあやまることができる。

相手も失敗をゆるしてくれる。

これまで以上になかよくなれる。

## 16 ムサシトミヨを守りたい

たかしの学年では、総合的な学習の時間に、身近な自然環境について各自でテーマを決めて学習に取り組んでいる。たかしは、生息数が減ったと言われている『ムサシトミヨ』に関心をもち調べてみることにした。

調べ学習を進めていると、ムサシトミヨはトゲ

ウオ科の小さな魚で、オスが水草を固めてピンポン玉のような巣を作り、卵がふ化するまでその巣を守ることに、一九八四年に熊谷市の天然記念物に指定されたことなどがわかってきた。

さらには『ムサシトミヨを守る会』が発足し、活動していることもわかった。



「ムサシトミヨと巣」 写真提供：さいたま水族館

「小さな魚が巣を作って守るなんておもしろいな。」  
そこでたかしは、『ムサシトミヨを守る会』に連絡をとり、くわしく聞いてみることにした。

「『ムサシトミヨを守る会』に参加するようになったきっかけは何ですか。」

「私の通っていた小学校では、ムサシトミヨの絶滅をふせぐため、毎年学校の池でムサシト

ミヨを飼育し、増やす活動をしていました。元荒川の環境に近づけるため、池に水草を植え、砂利をしいたり、毎日池の水温を測ったりするのは、大変な仕事でしたが、ムサシトミヨの稚魚がかえり、小さな魚がたくさん泳いでいるのを見たときは、本当に感動しました。その時の感動とムサシトミヨへの思いが忘れられず、この会に参加することにしたのです。」



たかしは、小学校でムサシトミヨの世話をし始めたことを聞いておどろいた。

「ムサシトミヨへの思いとは、どんなものですか。」

「ムサシトミヨは戦前、もっと多くの場所に生息していたそうです。しかし、一九五七年の異常気象と私たち人間が流す生活排水が原因で、ムサシトミヨの住める川が大変少なくなりました。今では元荒川のほんの一部にしか生息していません。それでも地域の人たちが、きれいな地下水をくみ上げて川に流したり、周辺の畑で使う農薬を少なくしたりするなど、の努力と協力があつて、ムサシトミヨの住める川が残されたということです。みんなが力を合わせて守ってきたムサシトミヨとその環境を守るために自分もできることをしたいと思つたのです。」

「自分にできること…。」

たかしは、この言葉が心に響いた。

そこで、たかしは、ムサシトミヨを守る会の活動を見に行くことにした。

会の人たちは元荒川の周りに高くしげった雑草をかりとつた

り、川の中のごみやヘドロを取りさつたりする仕事をしていた。みんな汗まれで顔は真っ赤だったが、どの人もとてもいきいきとした顔をしている。たかしは、何もしていない自分がなんだかはずかしくなった。

今度の火曜日は総合的な学習の時間に、各自が調べてきたことを発表することになって

いた。たかしは、自分の思いがみんなに伝わるといいな、と思つた。



行ってみよう、調べよう!

「さいたま水族館」



羽生市三田ヶ谷宝蔵寺七五一一  
〇四八(五六五)一〇一〇



SAITAMA

## 18 さきたまの丘おかに立つ

今日は社会科見学。ぼくは、なかよしの直也なおやとバスの座席ざせきに座すわった。めざすは、さきたま古墳群こふんぐん。ぼくは、社会科の時間に古墳について学んだことを思い出した。写真では見たことがあったが、実物を見るのは初めてだ。

遊園地に行くような楽しさとは少しちがうけれど、ふだんはなかなか見られないのが見られること、そして何よりも、みんなで学校の外に出かけられるということに、胸をわくわくさせていた。

バスは、一面に広がる田んぼの中を走り抜けて行く。田植えの稲の苗が青々としていたのは、ついこの前だったように感じられるが、今はまるで黄色のじゅうたんのようだ。稲はしっかりと実をつけ、穂ほを垂れていた。

バスは、さきたま古墳公園に到着した。

ぼくたちは、まず、公園内にある史跡しせきの博物館を見学した。

中に入ってまず目を引いたのは、大きな埴輪はにわだった。人の形や馬の形、家の形などいろいろあった。円筒埴輪えんとうわだかまといって大きな花びんのような埴輪もあった。

博物館の奥へ進むと、ガラスのケースに刀のような物が展示されていた。「金錯銘鉄剣きんさくめいてつけん」という名が付けられていた。この刀は、古墳に埋葬まいそうされていた人とともに出土したものだ。それも、今からおよそ千五百年前の物だという。気が遠くなるほど昔の事なんて想像そうぞうもつかない。いったいどんな世界だったのだ

ろう。

さらに、驚おどろいたのは、その刀に刻きざまれている文字である。

「名」「七月」「天下」「大王」など、今、ぼくたちが使っている漢字と同じだ。確か、漢字は、現在の中国から伝わってきた文字だと聞いたことがあったけれど、それから今までずっと形を変えずに伝えられてきているということがすごい。

この鉄剣に刻まれた一一五文字の漢字が、ぼくたちに何を伝えたかったのか。それに、この刀を持っていた人は、どんな人物だったのだろう。決して出会うことのできない人だが、同じ人間がその時代にも生活していたことを考えると、何だかぞくぞくしてきた。



「金錯銘鉄剣」 写真提供 さきたま史跡の博物館

【文化庁】

博物館を出ると、いよいよ古墳の見学だ。バスが走ってきた道路をわたり、しばらく歩いていくと、緑豊かな公園に大きな山が見えてきた。しかし、山にしては、平らな地面にこんもりと土が盛り上もがっており、自然にできたものではないことは推測すいそくできた。

「これが古墳？」

下から見上げる古墳は、形こそわからないが、丘のようにそびえ立っていた。「丸墓山古墳まるはかやま」という名がついていた。

この古墳には、階段がついていて登れるようになっていた。頂上に着いたらどんな景色が見られるのかと、自然に足取りが

軽くなったが、さすがに全部登り切った時には、息が上がっていた。

頂上は、いく本かの木がしげり、ゆるやかにふく風が心地よい。あらためてぼくは、古墳の上から辺りを見下ろした。すると、周りのあちらこちらから、別の古墳が姿を現した。將軍山古墳には、先ほど資料館に展示してあった円筒埴輪が、埋葬されている人を守るかのように、等間かくに並べられているのが見える。そして、あの鉄剣が発見された稲荷山古墳。形は見事な前方後円墳だ。ぼくは、本物の古墳をいくつも目の当たりにすると、さつきまで、どきどきしていた心臓が、すうっと静かになっていくのを感じた。



丸墓山古墳

どれくらいながめていたのだろう。そして、ふと、ぼくは考えた。

ぼくは、今、こうして生きているのだが、この命は、どれくらいの人によって受け継がれてきたのだろう。自分の命ではあるのだけれど、自分だけのものでもないような、不思議な感覚になった。

今から千五百年以上前に、もしかしたら、ここにだれかが

立って、ぼくと同じように、辺りを見わたしていたかもしれない。そこには、どんな景色が見えたのだろう。また、遠い未来を想像していたのかもしれない。どんな世界を望んでいたのだろう。

今、ぼくは、その未来の世界に生きている。ぼくが生きているこの世界は、その人が望んでいたような世界になっているのだろうか。ぼくたちは、未来の人たちのために、何を残し、何を伝えていけばいいのだろうか。

黄色に輝く稲穂がいくつもの線になって風になびいている。ぼくは、時の流れを感じながら、いつまでもいつまでも雄大な景色をながめていた。



將軍山古墳

行ってみよう、調べてみよう！

「さきたま古墳公園」

「さきたま史跡の博物館」



行田市埼玉四八三四  
〇四八(五五九)一一一



SAITAMA

## 25 耳をすませばふる里の音が聞こえてくるまち

「ささの葉さらさらのきは

にゆれる…」

下總皖一先生は、ほくた

ちの郷土大利根が生んだ偉

大な作曲家で、日本の音楽

を大きく発展させた人物である。

しかし、このように、大利根町（現在は加須市）を代表する偉大な人物であることが、町民に認識されるようになったのは、それほど古いことではない。



写真提供：おとおね童謡のふる里室

下總皖一先生は、たくさんどうようの童謡はもちろんであるが、日本全国、台湾やブラジルも含めて、たくさんどうようの校歌を作曲したことで有名である。その曲の一つ一つに、ふる里大利根の自然がもっているやさしさがおりこまれているという。町では、その童謡のもつやさしさを基本とし、みんなで手をたずさえてまちづくりを進めていこうと「童謡のふる里づくり宣言」を行ったのだ。

そこで、ぼくは、「下總皖一を偲しのぶ会」会長の中島さんに会っ

て話を聞くことにした。

会長さんは、知り合いの人から「大利根町には下總皖一という素晴らしい作曲家がいるじゃないか。」という話を聞いたそうだ。ちょうどその頃、町では、「下總皖一を偲ぶ会」が発足した。会の人たちは、下總先生についての資料を読んでいるうちに、下總先生の音楽家としての功績はもちろんであるが、下總先生の人間味あふれる人柄に、すっかりほれ込んでしまったのだそうだ。

会長さんは、自分の身近に、こんなにも偉大な作曲家がいたことを知り、様々な資料を見ているうちに、ゾクゾクと身震いをおぼえたそうだ。

今でこそ、「たなばたさま」「野菊」など、たくさんどうようの童謡の作曲家であるということは知れ渡っている。しかし、「下總皖一を偲ぶ会」を発足した当時は、下總先生のごことは、町民にも、ほとんど認識されていなかったという。それどころか、下總先生関連の資料等を保存しようとする活動でさえ、理解してもらえなかったそうである。

下總先生の生家を買取り、保存したいと願ったときも、なかなか実現しなかった。

（どうしたら、わかってもらえるだろう。）

（下總皖一という人物をもっともっと多くの人に知ってもらい

たい。

会の人たちは、どうすればよいのかと悩んでいた。

町の「童謡のふる里づくり」での様々な取り組みもあり、偲ぶ会の人たちの活動は少しずつ理解されるようになってきた。

「さわやかコーラス」「少年少女合唱団」「ハンドベルリンガーズ」など、下總先生の名曲を歌ったり演奏したりする人たちの活動もさかんになってきた。

会長さんは、他の協力を得て、「野菊のように」「利根のほとりに」という本も出版したのである。この本には、下總皖一先生の生い立ちや様々なエピソードが書かれている。

ぼくたちは、道德の時間や読書の時間にこの本を読み、下總先生という人物について詳しく知ることができた。そして、このような偉大な作曲家が自分たちのふる里にいたことをほこりに思う。

「童謡のふる里おとね」：町づくりの大きな柱の一つとして、下總皖一先生が脚光をあびるようになった今、下總皖一先生についての問い合わせが日本全国からあるという。「全国童謡唱歌サミット」も行われ、会長さんをはじめ、町の代表の方が参加したそうだ。

ぼくたちの郷土大利根が生んだ作曲家、下總皖一先生について、会長さんは熱く語ってくれた。

ぼくは、自分たちの町を愛し、町の偉人、下總皖一先生の功績をこれからも残そうとしている人たちがたくさんいることに、深く感動した。

ぼくたちが、これから生きていく中で、出会うであろう人たちに、伝えていきたい。

「耳をすませば、ふる里の音が聞こえてくるまち。それが、

ぼくたちの生まれ育ったふる

里『童謡のふる里おとね』ですよ。」と。

「遠い山から吹いてくるこさむ

い風にゆれながら…」

時報を知らせる下總皖一作曲の「野菊」が、今日も、すみきつた青空に鳴り響いている。



行ってみよっ、調べとみよっ!

「おとね童謡のふる里室」

(大利根水防センター)

加須市新川通六八〇

〇四八〇(七二)二九九〇(土日祝日開館)



SAITAMA

## 心に残る本の紹介

本は1冊ごとにちがった世界があります。その世界の中で、私たちは、人々の喜びや悲しみを知り、信頼と友情に励まされ、あるときは夢のような冒険に胸おどらせ、またあるときは自然の力に驚かされるなど、様々な感動を味わうことができます。本を友とすることで、こうした体験を積み重ね、より豊かな人生を歩むことができるでしょう。



書名	著作	出版社
アシュリー	アシュリー・ヘギ	フジテレビ出版(扶桑社)
五体不満足	乙武洋匡	講談社
デルトラ・クエスト	エミリー・ロッタ 岡田好恵訳	岩崎書店
ともだちは海のおい	工藤直子・作 長新太・絵	理論社
ライオンと魔女 ナルニア国ものがたり1	C. S. ルイス 瀬田貞二・訳	岩波書店
ねずみの騎士デスペローの物語	ケイト・ディカミロ 子安亜弥・訳	ポプラ社
星の王子さま	サン＝テグジュペリ	岩波書店〔ほか〕
南の島のチャタン	舟崎克彦・文 塩澤文男・写真	佼成出版社
ユウキ	伊藤 遊・作 上出慎也・画	福音館書店
よみがえれ、えりもの森	本木洋子・文 高田三郎・絵	新日本出版社
若おかみは小学生!	令文ヒロ子・作 亜沙美・絵	講談社(青い鳥文庫)
アンソニー ～はまなす写真館の物語～	茂市久美子・作 黒井健・絵	あかね書房
いちご1～5	倉橋燿子・作 さべあのみ・絵	講談社(青い鳥文庫)
シェーラひめのぼうけん〔シリーズ〕	村山早紀・作 佐竹美保・画	童心社(フォア文庫)
自分は自分、他人じゃない	吉本由美	ポプラ社
だから、あなたも生きぬいて	大平光代	講談社(青い鳥文庫)
走れメロス	太宰 治	ポプラ社〔ほか〕
バッテリー	あさのあつこ	教育画劇〔ほか〕
ハートボイス ～いつか翔べる日～	青木和雄・作 水野ぷりん・画	金の星社
ハリー・ポッターと賢者の石	J. K. ローリング 松岡佑子・訳	静山社
ぼくは、ぼく。 ～ふしぎなチカラを持つ、ある犬の物語～	大島まや・著 芝崎隆哉・画	講談社
目の見えない犬ダン	大西伝一郎・文 山口みねやす・絵	学習研究社
モモ	ミヒヤエル・エンデ 大島かおり・訳	岩波書店
マチルダは小さな大天才	ロアルド・ダール 宮下嶺夫・訳	評論社
おっちゃんの長い夏休み	岸川悦子・作 藤原ゆみこ・絵	金の星社
夏の庭 ～The friends～	湯本香樹実	新潮社(新潮文庫)[ほか]
アンネの日記	アンネ・フランク	文藝春秋
きまぐれロボット	星 新一	理論社〔ほか〕
ハッピーバースデー ～命かがやく瞬間～	青木和雄・作 加藤美紀・画	金の星社
だれも知らない小さな国	佐藤さとる・作 村上勉・絵	講談社
天の園 第1部～第6部	打木村治	偕成社

心に残る「子どもの本」100選 ～子どもたち・友だちにすすめる100冊の本～

発行 埼玉県教育委員会

## 埼玉県道徳教材資料集（小学校高学年版「夢にむかって」）

○監 修 尾田 幸雄 お茶の水女子大学名誉教授  
高島 元洋 お茶の水女子大学大学院教授  
押谷 由夫 昭和女子大学大学院教授  
蛭田 政弘 文教大学教授  
鈴木 賢一 元埼玉県道徳教育研究会会長

○協 力 堺 正一 立正大学教授  
宇宙航空研究開発機構 J A X A

○写真提供 熊谷市教育委員会  
さいたま水族館  
さきたま史跡の博物館  
渋沢史料館  
永井機械鑄造株式会社  
本庄市教育委員会  
（表紙）清水 勉

発 行 埼玉県教育委員会（平成22年2月）

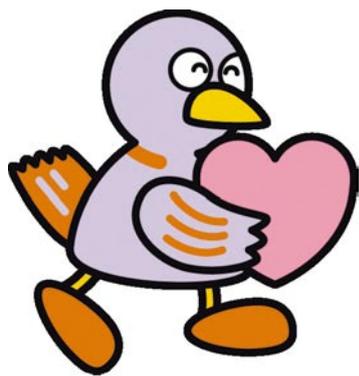
編 集 埼玉県教育局県立学校部生徒指導課

〒330-9301 さいたま市浦和区高砂3-15-1

TEL 048-830-6745

FAX 048-830-4952

E-mail : a6740@pref.saitama.lg.jp



埼玉県のマスコット コバトン